令和元年度　第１回　吉田町総合教育会議　会議録

１　開催期日　令和元年１１月５日（火）　午後１時００分

２　場　　所　吉田町中央公民館　１階ホール

３　出　席　者　田村 典彦 町長、栗林 芳樹 教育長
塚本 成男 教育委員、北澤 雅恵 教育委員
増田 真也 教育委員、河口 忠男 教育委員
事務局　八木 邦広 学校教育課長、大井 一弘 生涯学習課長
三輪 洋士 主席指導主事、平井 奉子 指導主事
谷澤 宏昭 指導主事、山村 加奈子 学校教育課統括

４　議事内容

１　開会

〇事務局

それでは定刻となりましたので、会議を始めたいと思います。初めに相互の挨拶を行いたいと思いますので御起立をお願いします。一同礼。御着席ください。

それではただいまから、令和元年度第１回吉田町総合教育会議を開会いたします。本日は大変お忙しい中、御出席を賜りありがとうございます。私は本日の進行を務めさせていただきます学校教育課課長の八木でございます。よろしくお願いいたします。

では、お手元に配布している資料の次第に沿って進めさせていただきます。初めに町長から御挨拶をお願いします。

⑴　町長あいさつ

〇田村町長

皆さんこんにちは。３年前に新しい学習指導要領が文科省から発表されました。来年度からは、小学校での完全実施。そういう面では、中学校での完全実施と、待ったなしの状況に入っています。皆様御承知のように、３年前に文科省からこの新しい学習指導要領が出た時に、今までは基本的に国から県、地方に丸投げするようなことはなかったんですね。初めてそのやり方について、まさに丸投げの状況で、文科省は下に振ったんですよね。これまでの学習指導要

領とは違って、新しいところが結構ございます。一つは時代の要請もございますから、プログラミングだとか、それから英語教育が小学校に下がってきた。そういった問題があって、主体的に考える等、今までとはちょっと違ったそういったところが強調されてきましたので、吉田町はその学習指導要領を消化して、どんな事業を進めればいいのか。おそらく今、他の市町も苦しんでいるのではないかと思いますし、吉田町もいよいよ待ったなしになってきたものですから、吉田町はＴＣＰトリビンスプランとして対応してきたわけですが、今までのいろいろなことがございまして、今日を迎えたわけですが、最終的に吉田町の子どもたちにとって、より良い形でこの学習指導要領を消化して、具体的な事業に結び付けることが可能だと思いますので、皆様にはお忙しいとは思いますが、ぜひともより良い意見を出して、我が町の新しい学習指導要領の消化について、御意見をいただければうれしく思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○事務局
　ありがとうございました。続いて教育長からごあいさつをお願いいたします。

⑵　教育長あいさつ

○栗林教育長
　改めまして皆さん、こんにちは。私は、平成２９年４月にこちらに来てから、新学習指導要領への対応ということで、その一翼を担ってきたわけですが、一つはこのＴＣＰトリビンスプランということ。あとは、この後、今日二つ議題がありますが、吉田町の教育大綱の改訂をどうするのかという話で、この二つは、まさに今後の吉田町の教育をどう変えていくのか。どのように今後未来を見据えてやっていくのかという大きな二つのプランであり、大綱であると思っていますので、丁寧に議論を進めていきたいと思っておりますし。またいろいろ報道などでは、当たり前をやめた学校とかですね。様々な独自の教育改革が全国で行われているような状況にございます。そういった中で、我々もどこを変えてどこを変えないのか。それは子どものためにとってどうなのか。そういったことをしっかり考えて、着実に議論を進めていく必要があろうかと思っております。短い時間ではありますが、忌憚のない意見交換をした上で、今後の教育の方向性を考えていければと思っております。よろしくお願いいたします。

○事務局
　ありがとうございました。では早速議事に入ります。ここからの議事の進行

につきましては、町長、よろしくお願いいたします。

２　議事

⑴　ＴＣＰトリビンスプランについて

〇田村町長

　では、次第に沿いまして議事を進行してまいります。最初に一つ目の議事でございます、ＴＣＰトリビンスプランについて、事務局より説明を求めます。

〇事務局

　本日、一つ目の議題である「ＴＣＰトリビンスプランについて」ですが、本日につきましては、ＴＣＰトリビンスプランの中の授業日の平準化というものについて、議論していただきたいと考えております。

　また、もう一つはですね、このＴＣＰトリビンスプランの全体の構造についてもですね、併せて御議論をいただきたいと考えております。

　まず、今回お話をしていただく上で、資料№.１を御覧ください。こちらの資料№.１につきましては、平成３０年１１月１６日に総合教育会議を開催させていただきまして、決定をしているものでございます。このうち、各柱のアの部分を御覧いただきますと、授業日の平準化、授業日数基本２２０日。平成３２年度完全実施。こちらについて移行期間の取組及び車座対話を踏まえ、学校と今後さらに検討ということで決着が付いております。こちらについて、今回資料№.２になりますが、その文言については、授業時間及び授業準備時間を余裕を持って確保するために、授業日数の平準化を図るというところで、これは事務局案でございますが、こういった形で変更していきたいと考えております。

　また、構造につきましても、前回の資料№.１と見比べていただくと、これまで各柱についてアイウという形で進めさせていただいておりましたが、アについては横串を差したような形で全体に掛かることですので、今回、資料№.２を見ていただくと、アの部分は全体に串を通したような形で記載をさせていただいております。

　さらに、資料№.２の⑷を見ていただくと、１から３を支える基盤的整備ということで、これまで各柱の中に入っていた、例えば、快適な学習環境の整備、エアコンとかトイレの改修。そういったものは⑴に入っておりました。あとは、ＩＣＴ教育の推進等も、１の方に入っておりますが、この基盤的整備につきましても全体に関わる土台、基盤として整備するものであるということで、今回構造的にもこういった横串を差した形でプランを変更していきたいということになります。

　授業日の平準化について、御説明申し上げます。この授業日の平準化につき

ましては、取組と車座対話を踏まえ、今後さらに検討という中で、これまで授業日の平準化を行いつつ、これまで来ております。資料№.３の６ページを御覧ください。こちらについては、授業日の平準化のこれまでの取組ということで掲載させていただいております。小学校、中学校とそれぞれ各年度、どこでも同じ授業日と長期休業日で行ってきたということを書いてございます。小学校につきましては、平成２８年度の２０６日から、平成３０年度は２１２から２１３日となって、今年度は２０７から８となっています。中学校につきましても、平成２８年度に２０６日だったものが、３０年度には２０９日。今年度は２０５日となっています。今年度減っていることにつきましては、アスタリスクにも書かせていただいていますが、天皇即位の日及び即位礼正殿の儀が行われる日を休日とする法律の制定により、例年より平日が少なくなっていることから、授業日が少なくなっています。

これまでの取組の中で、平準化による成果としましては、８ページを御覧ください。各小中学校の超過勤務時間の推移を、掲載させていただいております。こちらを見ていただくと分かりますように、授業日を平準化してきた成果としまして、小学校につきましては、平成２８から令和元年、今まで月平均７時間マイナスになっているという結果でございます。中学校につきましても、平成２８年度の８７．５時間から令和元年度は７８時間ですね。それから比べるとマイナス５時間ぐらいの削減が行われているという成果が出ています。

続きまして、９ページを御覧ください。こちらは、３０年度に実施した教職員との車座対話において出された意見でございます。この平準化を実際に行ってみてどうだったかというところですね。

小学校については、一番上の意見を見ていただくと、やってみて業務時間内に会議が設定できたり、放課後に余裕の時間が生まれたりして、平準化の効果を実感しているという御意見をいただいております。その一方、三つ目ですが、平準化の効果は実感しているが、かといってこれ以上授業日を増やすことが良いとも思わない。来年度以降は、今年度を基準として、暦の関係などに配慮しながら教育課程を編成していくのが良いのではないかという御意見をいただいています。

また、中学校につきましては、小学校とまたいろいろ状況が違うところもございまして、夏休み、中体連の大会、高校の１日体験入学があり、なかなか夏休みを授業日にするにも限界があると。小学校と同様に考えるのは難しいという御意見をいただいております。実際に平準化を行ってですね、授業が早く終わったとしても、結局部活動に時間を奪われてしまうから、部活動の改革とセットでやる必要があるのではないかという御意見もいただいております。

続きまして、１０ページを御覧ください。こちらは住吉小学校でのアンケー

トによる意見、主観的な指標ではございますが、実際にやってみた効果としてどうだったかというものにつきましては、教材研究の時間が増えたと感じる教員の割合が増えているということや、負の多忙感を感じるという方も、平準化を行ってみてそれが減ってきているといった、平準化の効果については、効果が出ているというものでございます。ですので、この平準化について一定の効果はありますが、ただ、なかなかやはり、これ以上の日数をやっていくのは難しいという意見ですとか、元々２２０日というものについては、目的ではないということで説明はしておりますが、やはりなかなか学校側からすると、それが目的化してしまっているのではないかという意見もございまして、２２０日というものを出していくよりも、もっとその内容としてどうしていくのかを出した方がいいのではないかという意見もいただいております。

今回検討した中ではですね、その平準化については、事務局といたしましては、授業日を増加させながらも、やはり今回モジュールというものを導入して、時間を生み出してはどうかということで考えております。これは確かな学力を定着させていくためには、一つモジュールというものが効果があるのではないかというので、事務局で考えておりまして、そのモジュールというものを使いながら、併せて授業日の平準化を進めていけたらということにさせていただいています。

実際に、モジュールをどういうふうにやっていくかですが、１１ページを御覧ください。こちらは、小学校における授業日の平準化の方向性のイメージでございます。まず、モジュールというのは、もともと小学校であれば４５分間の授業を、例えば１５分、３回という形で区切った中で、時間が少ない中で進めていって、１５分を３回やれば、１時間の授業をやったと見なすという考え方となります。そういう中でですね、今回のモジュールで総合的な学習の時間、これを約１５時間程度モジュールに当てると。さらに国語、算数、外国語等、そういった授業でさらに１５時間モジュールを実施するということで、３０時間の時間の生み出しが可能となります。そうしますと、年間授業時間を１，１００時間と考えた時に、そのうち３０時間はモジュールで生み出しますので、下表のところにありますとおり、２１３日を５時間でやるのと同じような効果があると考えております。

続きまして、１２ページを御覧ください。こちらは、中学校におけるイメージでございます。こちらにつきましても、小学校と考え方は同じになりますが、モジュールの導入については、中学校につきましては、今２０時間分をモジュールにしてはどうかと考えております。そうしますと、小学校より少し少ないことにはなりますが、こういったところで新たな時間の生み出しに効果があると。さらに教育的にも効果があると言えるのではないかということで考えてお

ります。それでは、実際にモジュールをどういう考え方で行っていくかについて御説明申し上げます。

○事務局

続けて説明させていただきます。資料の１３ページを御覧ください。総合的な学習の時間の一部モジュール化の構想図が載っています。私たちは、論理的思考力・読解力・情報活用能力という三つの力が、子どもたちに必要だと考えています。つきましては、この力というのは、各教科に横串を通すような形で、どの教科にも必要になるものですが、今お話があったように、そのモジュールの時間を使って、その論理的思考力・読解力・情報活用能力というのを育みたいという思いを持っています。

１７ページを御覧ください。具体的な内容のイメージをここでお話をさせていただきます。例えば、先ほどお話があった１５分間の時間の中で、読解力を育成する授業の例として、例えば、新聞記事を読みます。そして、記事を読んだ感想をまとめて書きます。見出しを考えたり、図や表を文章に、文章を図や表に表現する形で考えていきます。まず、こういうような展開例が考えられるかなと思います。

続いて、１８ページを御覧ください。論理的思考力ということで、そこに思考ツールという図が載っています。右上に丸が三つ順番になっていまして、左下のところは丸と丸が重なっています。右下はＹ字型になっていますが、それぞれの与えられた問題によって、例えば、一つ目の丸が三つ重なっているようなところであれば、説明書を読んで手順を整理する。それから、左下の文章を読んで、比較したり分類したり考えるというのが、そこの丸と丸が重なっているこのような図に落とし込んでいって、自分の思考をここで整理をしていくということができていけば、一つは論理的思考力を育むことができる近道になるのかなということを考えました。

１９ページを御覧ください。情報活用能力を育成する授業例としては、様々な情報から必要な情報を選択して、それを表やグラフにまとめること。それから、発表の目的に応じてメモをするといったことでも情報活用能力を育成することにつながってくると思います。つまり、このようなものを組織的に組んでいきながら、その１５分間の中でモジュールの時間を使って、子どもたちに授業者が提示していこうという考え方であるということです。

○事務局

今御説明したとおり、モジュールというものを確かな学力の定着の役に立つのではないかということで、事務局としては捉えていますので、そこを今回盛

り込みながら、授業日の平準化を進めたいと考えております。
　資料№.２を御覧いただきたいのですが、アの授業日の平準化についての考え方について、少し御意見をいただきたいということで。あとはその全体の構造について、今回見せ方等が変わってきておりますので、こういう形でいいかということも含めて意見もよろしくお願いいたします。説明は以上です。

〇田村町長
　説明が終わりました。事務局からの説明に対して、議題として挙げられました授業日の平準化について等について、それぞれの意見交換を行いたいと思います。
　まず初めに、授業日の平準化についてですが、話の切り口を、先生をされていた河口委員、先生の経験がございますし、授業ってどんなものがあるのか、いろいろお分かりだと思いますので、ちょっと先生の方から、先鞭を切っていただけますか。

〇河口委員
　私も昨年から教育委員の仕事をさせていただいて、このトリビンスプランが始まった頃は、実際に現場で働いていたので、その自分が経験した部分もあったり、それから今も住吉の方でお世話になっていますので、そういうこともあるので、ちょっと軸足が学校の中に入っている部分もあるし、ちょっと出ている部分もあるということで考えているんですけどね。平準化は結論から言うと、超過勤務、多忙感っていうか。自分はよくやっていて、４時半までの中に収まりきらないと。実際に６時間か５時間かというのが資料に出てくるのですが、１日当たりの授業が６時間の時と５時間の時と比べると、５時間の時は３時頃に子どもを帰して、それから４時半まで１時間ぐらいは仕事ができるんです。自分の担当のものだとか、宿題を見たり、テストの丸付けだとかできたのですが、それが６時間になるとね、もうすぐ４時半です。４時頃から始めてもすぐに３０分ぐらい経ってしまいます。すると、当然仕事は勤務時間外ということになって、その後永遠に続く状態になって。その辺を解消するには、やっぱり手を打たなければいけない。努力ではもう無理だと。要するにだんだん先生の仕事は授業だけじゃなくて、授業の準備以外にも子どもの問題行動への対応だとか、保護者への対応とかいろいろありますので、時間がいくらあっても足りないというね。努力すればいいというものでもない。じゃあどうするかというと考えた時に、やっぱり最初考えたトリビンスプラン。要するに、勤務時間の中を少しでも早く切り上げて、そして健康的にもいいしね。次の日の仕事が違いますよね。８時、９時までやった次の日と、例えば７時、６時で終わった時

では、全然違いますから。そうすると、子どもにとっても全然違うと。先生方が忙しければ、当然子どもの方への授業への準備もできなかったり、学力向上にも影響してくるので、早く切り上げればそれだけいいことがあると思うんですね。そのための方法として、こういうのがあると思うんですけど。じゃあ、実際にどうなのかというと、いろいろあって。授業日数が増えちゃうなとかね。要するに、６時間を５時間にすることによって平準化していくと、その分どうするかというと、日を増やすしかないわけですね。すると、当然夏休みに掛かってくる、掛かってこないという話になってきたり。夏休みが変わってくるといろいろなことがあって、行事が関係してきてそれが困るとか、いろいろなことが去年とかその前とかいろいろ出てきたりするものですから、非常に難しい部分があって。単純に日数をじゃあ増やして、要するに、全部５時間にしてしまって、先生方が３時頃から仕事ができる状態にした時に、その６時間目をどうするかということになってね。それを日数だけで消化しようとすると、やっぱり夏休みは、８月過ぎまでやるとかやらないとかっていう話になるものだから、それを現場の方で考えると、やっぱり何とかならないかという話になるのですが。

そうすると、他に何かいい方法がないかということで、モジュールというものを考えたと思うのですけれどもね。要するに、１５分間の時間をまとめれば４５分になるから、それが１時間になる。それを３０時間やれば、その分が今までやるべき６時間目の時間ということで、補助できるということで、モジュールというのを考えたと思うのですが。そういうことでやっていって、今何となくこんな形でまとまってきていると思うんですけどね。こちら、提案する事務局側と、実際の現場との感じ方もあるので、今後どうしていったらいいのかなあということで、とにかくちょっと工夫が必要だなと思います。

〇増田委員

私は、事務局案の書きぶりには賛成していまして。むしろこちらの資料№３の１１ページ。『「授業日数の増」と「モジュールの導入」による「授業日の平準化」』というのが、非常に分かりやすいなと思っているのですが。これまで教員の方から、かなり本音が出たと思うんですね。お聞きする中で、やはりそもそも小学校の先生と中学校の先生というのが、学級担任制で、中学が教科担任制ということで、そこで大きく考え方が違うなというのが改めて分かりました。この平準化による効果がやっぱり大きいのは、学級担任制の小学校の先生。ですから中学校の先生は、平準化というところを強く言ってもあまり響かないというか。むしろ中学校の先生というのは、全体の方向付けをするというのは、ちょっと難しいのかなというのを話を聞く中で思いました。

小学校の先生が全体の方向性を示してあげた方が、分かりやすいのでしょうけれども、中学校の先生は平準化でなく、平準化もそうですけど、より各教師がトリビンスプランの目的というのを先生自身が理解をしていただいて、それぞれが時間を作る取組をするという方に向いた方がいいのではないかと思いました。

あとは、モジュールについては、これまでのいろいろな説明を聞いて、自分なりに賛成するところはあるのですが、その内容については、ちょっとまだ理解不足で。そもそもモジュールというのが、集中力を鍛えるというか、１５分という短い時間で集中して、学習の基礎を徹底的に反復徹底することで、集中力を鍛えることを目的にしているのを何かの本で見たことがあるのですが。それが今回の案だと、思考力の向上と置いているので。思考ツールの活用というところに向いているので、その点もうちょっと自分の中ではこなしていかなければいけないところですね。

〇北澤委員

アの部分、表現の部分。ここには補足資料があるので、とてもよく分かりやすく書いている中で、本当に平準化をする意味、目的をしっかり理解した上で、このトリビンスプランの保護者、教師、子どもを通しての平準化による効果というものを、すごく期待したいと思っているので。事務局も学校で先生方との協議を重ねていただいている中で、こういう表現が出てきたと思うので、授業日の平準化を通して考えていきたいと思います。

〇塚本委員

住吉小学校が、未来の学校夢プロジェクトで、県の指定を受けながら、最初に取り組んだ時に、やっぱり先生方の意識改革が一番最初に行われたと思うんですね。多忙感と多忙とは違うとか、自分のやってきた仕事の洗い出しというか、こういう仕事をこれだけやっていて、果たしてこれは効率的だったのかどうなのかという評価をしたと。自分の仕事のやり方を見直したというところが最初にあって、それで、意見を出し合ってこういう形がいいのではないかと住吉小学校が取り組んだ成果として、おそらく１０ページに入っているのがそういったところで改善されたところが、移行期間の取組として載っているのだと思うのですが。今、増田委員からあったように、小学校では皆同じ仕事をしている。先生方は同じ仕事をしているので、同じ方向に向きやすいというのがある中で、一方、中学校で取り組むのが難しいというのは、それは前回も、この総合教育会議でも出て、移行期間の取組及び車座対話を踏まえて、今後さらに検討することを継続していきましょうという話にまとまって、その結果、今の

この資料になっていると思うのですが。
　なかなか自発的に取り組むということが難しいのだなという印象で、学校が自発的に。住吉小学校は県の指定を受けて、報告もしなければならないところもあったと思うんですよね。その中でかなり根本的に考え直したものだから、自分たちでこういう働き方というのを、意識を持って変えていくことができたと思うんですね。中学で、もしそれをしてもらうには、どういう方法がいいのか。教育委員会で事務局と指導主事が中学に行って、先生方と調整をしながら、形を整えていくということしていると思うんですが。結果間に合わなかったということだと思うんですね。中学の場合、これで言うと平成３３年とかだと思うのですが、なかなか方向性としては厳しい。そうだとすると、先生の意識を変えるのが一番重要なのですが、そのためにどういうことをしたらいいのか。この表現で意識を変えるための表現ができるのかというと、なかなか表現だけでは難しいと思うので。
　ただ、あまり施策の概要で書いてあることが漠然としすぎていると、目的が明確化しないというか。もちろん、吉田町の子どもたちに確かな学力を付けてもらいたいというのは、大きな目的なのですが。そのために平準化があって、その平準化しなければ、子ども達に確かな学力を付けることができないというならば、もう少し具体性を持ったところまで落とし込んだものをここに持ってこないと、なかなか進まないというか、意識改革までは行かないなというのは、実感として、これまで４年間やってきた中で、私は意識改革は難しいなと感じています。中学の先生の意識改革を主体的にやってもらうことは、難しいと私は客観的に感じています。

〇栗林教育長
　事務局案ということで、私も一通り目を通しておりますが、その上で意見を述べさせていただきたいと思っています。今、塚本委員から話がありましたように、やはり、自発的にどう取り組んでもらうかというところは、とても難しいなと思っています。今年度に入って指導主事がどんどん学校に入ってもらって、学校の様子を見て、また先生方の話を聞いて、それをいろいろな施策に還元していきましょうということで、学校になるべく行ける時は行くというような方針で、学校を回ってもらっておりますけど。それでもどこに本音があって、どれがおおよその意見で、どれが少数派なのかというところを整理していくのは、とても難しいなと思っています。
　その上で資料２の表現振りのところ。アの授業日の平準化というところです。資料１と比べていただくと一目瞭然ですが、車座対話など私も参加をしましたが、その中で２２０日という数字が目的化してしまうという話があって。それ

はどうなのかというところが、大きく先生方から意見としてありました。ただ、一方で目的化してしまうから、日数を削ってこういう表現にした時に、逆に形骸化してしまうことはないかなというのは、少しこの表現を見ながら自分自身としても悩んでいるところです。そこのうまい表現というか、目的化しないように、かといって形骸化しないように、この平準化、今教育委員会として考えているこの平準化が、どのような表現にすれば先生方に伝わるのか。さらに我々もそうですし、教員もそうですけれども、異動があって担当者が替わって、管理職が替わってということはございますので。そういった人が替わっても、この表現を見れば、ああ、こういう取組を町として推進していくのだなというように、人が替われば解釈も替わってしまって、また形骸化していくというようなことにならないような表現にするには、どうしたらいいのかということは、もう少し検討の余地があるのかなということは思って、これを見比べながら、また委員の皆さんの意見を聞きながら考えるところです。

〇田村町長

私、前々からですね、考えるのですが。要は、先生は子ども達に対して授業をしますよね。要は、より良い授業をするわけですよね。先生方は望むわけですよね。より良いというのは何なのかというと、アウトプットということを使ってもいいと思うのですけれども、子どもたちに学力が定着する。それがより良い授業なんですね。じゃあ、より良い授業をするためには、どうすればいいのですかというと、より良い授業の内容をより良くするために、授業を研究するための時間を増やす。で、その授業準備のための時間を増やす。すると、単に時間を増やすだけじゃなくて、その周辺のことについてもちゃんと環境を整備してやると。それがちゃんとできて、より良い授業ができて、子どもたちの学力が上がって定着すれば、それでいいんですよね。塚本さんが、ある意味ズバッと意見を言ったのですが、先生の意識を変えるのは難しいと。結果として、この３年、塚本さんは教育委員としていろいろな場に出て、結果として、なかなか難しいと言ったんですね。そこなんですよね。そこでまた河口委員に振るのですが、先生の意識が変わるのが難しいのは、何なんですか。

〇河口委員

難しいですね。その質問も難しいんだけど。それぞれ先生方は、自信を持ってやっているっていうか、プライドを持ってやっているっていうか。やっぱりこう、教室の中では自分が一番偉いというか。だから子どもたちに教えているっていう。あくまでも教えている、指導しているというのがあるから、逆に謙虚になれなのかなとは思うんですけどね。より良い授業を作るということは、

町長がおっしゃるとおりで、やっぱりあれですよね、教材の準備の時間が十分にあれば、いい授業ができて、子どもの学力が伸びるということなんだけど、現状ではいろいろな仕事に追われてね、それだけに時間を費やすことはできないので、そうなっちゃうんだけど。これからプログラミング学習とか、外国語だとか増えてくるから、余計に多忙感というか、忙しくなると思うんだよね。その辺をどうするかというあたりが、やっぱりＴＣＰで授業の平準化を進めていく必要もあると思うんですけど。他には方法がないと思うんですけどね。他にいい方法があったといっても、例えば、小中学校に質問しても出てこないと思うんですよ。それをいかにやっていくかということなんだけれども。問題はね、モジュールをやって授業が確保されればいいじゃないかってなっちゃうと、形骸化すると思うんですね。だから今でさえ減っているのに、モジュールを入れたことによって授業が確保ができた、じゃあこの日数でいいじゃないかってなると、もともと言っていた２２０日が消えちゃうっていうね。それはどんどん形骸化していくというのが心配だなと思うので。それは教育長がおっしゃったとおり、どうやっていくかなんですよね。

〇田村町長

行政の性格として、先生方の世界と比較して考えるとあれなんですが。行政というものは、まず監査委員というのがいるんですよね。監査が入るんですよ。適性に業務が運営されていますかとか、行政の実務がより良くいっていますかという監査が入るんですね。もう１点は、議会があるんですね。議会というのは行政について厳しく追及されるわけですね。行政というものは、自分でやりたいようにはなれないんですね。常に目が光っていますから、監査、議会と。教育の世界というのは、今言ったように単純な話、より良い授業をするためにはどうしたらいいのですかと。授業準備のための時間をちゃんとしてということになりますよね。より良い授業をやったかどうかというのは、単純な話、成果として出るわけですよね。その成果というと、今、客観的な成果というのは、単純なことなのですよ。全国学力・学習状況調査というものが、客観的なんですね。そこで出ちゃうわけです。

本来先生というのは、先生の授業を外部から監査することもないんですよ。だから、本当はですね、全く第三者的なもの、先生方の授業についてちゃんと、監査と言っては申し訳ないのですけれども、それをやって、それを保護者の皆さんにちゃんと説明するとか。教育の世界というのは、なかなか客観的に保護者の皆さんであるとか、町民の皆さんであるとか、こういうふうな授業をやったり、なかなかそういう機会がないですからね。

○河口委員
　結局、私も３年間町の方にいたので、その時に思ったのが、やっぱり厳しいなって言うかね。教育行政の現場というのは、お金が動いているだけあって、常に結果を求められているというか。逆に、教育現場に行くと、そこが弱くてね。例えば、指標がありますよね。それに対しても、静岡県の平均以上を取るとなっているんだけれども、それが達成できなかったらどうなるかというあたりがね。その辺の厳しさが、甘いかなって感じますね。

○事務局
　すいません。今、河口委員から指標の話がありましたが、今回このプランの見直しというか、そこに当たって、指標というものを検討させていただいております。それがですね、補足資料、資料№３の３ページにございます。そこに二つ指標を掲げさせていただいております。一つが、全国学力・学習状況調査において、全科目の平均正答率が静岡県平均以上。二つ目が、県が実施する学力調査において、全科目の平均得点が静岡県平均以上ということで、今回ですね、こちらの文言と合わせて、こうした指標も整理していきたいと考えております。
　あとモジュールについて、先程うちの方は、それを進めていきたいという話の中で、２１ページを御覧ください。モジュールをどういうふうに進めて、どういうところがあるかというところが載せてありますので、事務局としては３年を目途にこのモジュールという取組を導入しながらですね、フォローアップ、再検討をしながら進めていきたいということで今考えておりまして。これがですね、仮にモジュールが、これがずっと続くというわけでもなく、まずこの検証もしながら、まずは３年間やってみてはどうかなということで、考えて提案させていただいております。少し説明が足りなかったものですから、ここで説明させていただきます。以上です。

○田村町長
　要は、客観指標というものを導入しないと、評価にならないですよね。主観指標をいくらやってもだめなんですよね。いかがですか、そのへんは。

○栗林教育長
　そうですね。なかなか教育現場において客観的に見るというところが、これまでもそうですが、難しい面があるし。それを教育現場でよしとしてこなかったようなところもあるのではないかというのは、すごく感じています。ですけれども、行政と全く一緒に考えていいのかどうかというのは、また分かりませ

んけれども。我々は、客観的に見られるのが当たり前になってきて。おそらく世の中も、そういう風潮にあるのではないかなというのは感じています。なので、学校現場でも可能な限り主観的にというのではなくて、客観的に見た時にどうなのかということで、見ていくということは大切だと思っています。

そういう意味で、先ほど河口委員が「学校が」という話がありましたが、なかなか学校って閉じられた世界であって、なかなか外部から見に行きにくいというか、そういうところもあるのではないかなと思いますし。また、授業を先生方も、あまり普段の授業を見られることに慣れていないというかですね。そこはそういう空気感というか、これまでの文化というか、そういうものがあるのだろうと思っています。文科省なんかも社会に開かれた学校とか、社会に開かれた教育課程ということを今回うたっていて、どんどん学校を開いていって、学校でこういうことをやっているんだよということを、みんな社会の人に知ってもらって、それで意見もあるだろうし、協力をしてくれることもあるだろうしということで、より良い学校教育を、それで作っていこうというような方針なので。指標というものも含めてですが、社会にどんどん学校を開いていくことが大切なんだと思います。

○田村町長

塚本委員は企業を経営しているので、そういうところから言うといかがですか。

○塚本委員

自分の会社のことを言うと、なかなか恥ずかしいものですから。経営者仲間とか、日頃そういう経営者の人たちと情報交換をしている中でね。やっぱり今働き方改革というのがすごく大きな問題として出てくるのですが、国は中小企業と言いますが、日本の９割弱が中小企業なんですが、中小企業とさらにその下の零細企業というのがあって、実はこの吉田町なんかでも中小企業というよりも零細企業が多いというね。それが地方の現実で。そうするとなかなか従業員を週休２日とか年休を１０日とか２０日とかっていうのは、なかなか法律通りに実施するのは難しいのが、現実なんですね。それでまあ人が集まらない。会社が廃業していくという悪循環があるのですが。最近の全国的な就職に対しての情報交換の中で、ガイダンスとかで言うのは、その会社の将来性ややりがいや働き方というものが、すごく上位で企業って選ばれているんですね。そうすると、本当に年次休暇が１２０日とか、３日に１回休み以上の会社とかが選ばれたり、もちろん残業はないとか、そういう会社が選ばれる傾向がある。今の若い人たちはそういうところに行きがち。静岡県はどうかというと、静岡県

の教職員は、倍率が下がっていて教員のなりてがいない。７０時間、８０時間の残業時間が公になってくると、大変な仕事に就きたくないという。そうすると教員になる人たちも、本当に優秀で志の高い人たちが、他の企業に流れて教員にならないという現実もあると。すると、国の根幹、子どもたちの教育が揺らいでくることになると思うので、すごく良くない傾向だなと思います。ただ、僕ら中小零細企業は、なかなか改革を進めづらい。学校も、でも規模的にはうちなんかと同じぐらい、吉中は５０人とかの規模だと。会社の場合は、結構社長の言うことは聞くのですが、なかなか校長先生の言うことを中学の職員室だとそこまで聞かないのかなっていう。会社とはちょっと違うなというのは感じますね、今まで見た中で。

　でも、ちょっと話が変わるのですが、この間、すみれ保育園を視察させてもらったんですね。で、松嵜先生。千葉大の松嵜先生がみえていて。他の園の先生方も研究に行ったのですが、私も行ってびっくりしたのですが、中を見たら素晴らしい施設でね。それで松嵜先生が幼児教育カリキュラムを作って、３年やってみて、ものすごく変わったって評価してくれているんですね。その幼保、特に保育園の先生たちの意識が変わって、園自体の環境も変わって、子どもたちの今それこそ小学校・中学校でこれから言われているアクティブラーニングというのが、幼保の中ですごく意識されて、そういう環境で吉田町はすごく変わった。小学校１年生から変わってきていると言ってくれたんですね。そういう意味では、先生と話をしたのは、これがね、小中と続いていくのが理想で、最終的に中学でできて、吉田町から出していくというのが理想だけれども。ぜひこれを中学の先生とか小学校の先生にもね。すみれ保育園、他も、さくら保育園などもみんなそうですけど、見てもらいたい。見てどう感じるかを聞いてみたい。その松嵜先生という第三者ですよね、言わば。それが吉田町の幼保のカリキュラムを含めた今やっていることが、全国的にも評価できるレベルであると言ってくださっているということは、そういうことを特に中学の先生も。聞きたいのは、どうして保育園の先生たちの意識が変わったのか聞きたいですけど。答えられる方がいればあれですが。そういう感じでね、外部の人、松嵜先生のおかげなのか、みんなで話し合ってカリキュラムを作って、こう行こうと決めてやったから意識が変わったのか。それがもし成功例とするならばね。中学の先生もそういう形で行けないのかなと。この間の保育園を訪問した時に思ったのですが。その辺ちょっと分かる方がいれば。

〇事務局

　今の話を受けまして、松嵜先生、３年以上関わってくださっているわけなのですが。最初は本当に何もない状態だったものですから、各園から課題だとか

そういうものを持ち寄って、現場の先生方の話し合いの中で、カリキュラムが少しずつできたということなんですね。そこのところに最先端のところで、お仕事をされている松嵜先生からの助言とうまく絡んで、幼児教育カリキュラムというものができて、そして他のスタートカリキュラムというのが小学校でできて。そこの接続が、今やっと少し軌道に乗ってきている状態だと思うんですよね。ですので、やはり一つは、現場の意見をもっと取り入れながらも、そこに適切な支援が入って、みんなでやっていこうというような意欲が湧き起こってくるっていうのがね。今、委員がおっしゃるように、小中のこれからつながりを考えていく上でも、大事になってくるキーワードなのかもしれないなと聞いていて思いました。

〇塚本委員

保育園の園長先生というのは、町の職員じゃないですか。そこがかなり一つね、ポイントだったのかなという気はしますけどね。町の。先生と言うよりも、町の職員ですよね。その辺の違いがあるのかなというのを感じますね。園長先生の意識が変わったと思うんですね。

〇田村町長

増田委員は、法律関係でいろいろな外からの話を聞いていると思うのですが、今話題になっている客観的な指標を求めるようなことが、世の中結構強くなってきていると思いますか。

〇増田委員

客観的なということは、今ちょっと答えが出ないのですが、今のお話を聞いて思ったことでいいですか。今のお話を聞いて、私の仕事が裁判官に通じるものがあるかなと思ったんです。裁判官は個々が独立していて、他の裁判官の何も左右されない、自分で全てを決められるという権限があるわけですが。そうすると、やはりその中に自分だけに閉じこもりがちになってしまって、周りの意見をなかなか聞くことができない。自分だけの世界になってしまうというのが、ちょっと共通するところを感じました。裁判所はそれでは駄目だというので裁判員制度が入ってきて。だから、そういう意味では社会的にはそういうことなのだと思います。ですから、やはり先生と言うと授業でしょうから、授業をよりオープンにして、公開にして、社会に開かれたという言い方になるのでしょうけれども、とにかく見られるところをもう少し増やすべきだと思いました。

○田村町長
　北澤さんは、主婦でお子さんがいらっしゃるんですけれども、お母さん、保護者の目から見た学校教育ってどういう印象ですか。

○北澤委員
　子どもを預けていますので、やはり先生たちには、子どもを安心して任せたいというのがすごくありますね。で、すごくこう不安になる部分というのは、正直本当に持つ時があります。子どもを通して、子どもとの会話を通して、学校での出来事、授業の内容等の話の中で、保護者としてちょっと不安になる部分というのはなくはないという。その中で、最初にも思ったのですけれども、先生の多忙感。お忙しいからこそ、子どもたちに目が行かないんじゃないかとかと。保護者が子どもに対しては、絶対的な責任を持つのですが、学校にいる間の子どもたちに対しては、やはり責任を持っていただきたいというのがすごく強くあるんですよね。見てもらっているという部分もあるのですが、やはり学校の先生だからこそ、言葉はあれですけれども、しっかりしてほしいという。そういう部分が、正直、親としてはそういう部分もすごく感謝している部分も大きいのですが。子どもを任せているという意味では、厳しく見る部分はすごくあるんですけど。教育委員になってから、各学校に行かせていただいている間で、やはりすごくこう校長先生、教頭先生がすごく頑張っている学校がとても多くて。その雰囲気がすごく下に伝わっているなっていうような学校もあれば、切り離されているような部分も見えて。しっかりうまく回っていない部分というのも感じることもあるのですが。やはりうまく回っているなって感じるような雰囲気の学校というのは、本当に地域の方の意見をすごく、それこそ、私なんかも意見もすごく覚えていてくださっていて、あの時言ってくださったのがということを言ってくださったりという、周りの意見をすごくしっかり受け止めてくださる先生がいらっしゃる学校というのは、本当にそこからまたその先生が広めてくれる、浸透させてくれているという雰囲気が本当に伝わってくるので、やはりそういったものを各学校に求めていきたいなというのは、すごくあります。

○田村町長
　単純な話、学力の向上と学力の定着というのは、ある程度分かりやすい教育の目的ですよね。小中学校もね。それに対して先生方というのは、自分の考えでは、俺はちゃんとやっているのだという意見があるのですが。客観的にと言われた時は、どんなことになるのでしょうね。

〇河口委員
　難しいんですよね。もちろん学力を付けるためにやっているのも仕事だと。みんなそう思っていると思うのですが、じゃあ点数だけでそうかというのも一方であってね。人間を育てると言うか、そういうふうな感じで、そこで学力が付いた場合には、人間も育っていますよ、学力が付きますよで、万歳ですよね。ところが、結果が伴わない場合にね。いや、学力だけじゃないよって逃げているって言うかね。逃げやすい。そういうふうな感じもしますよね。だからその辺で厳しいと言うか、客観的なことでしていかないと、やっぱり学力だけじゃないっていうね。点数だけじゃないっていう逃げ場を作っちゃいけないかなって思いますけどね。

〇田村町長
　非常に難しい意見が出ましたが。基本的には今言っているようにあれですよね。教育の目的は、小中学校の場合は学力の向上。人間としてどうのこうのというのは、客観指標としては、なかなか入り込むことが難しいですよね。しかし、学力の向上とか、学力の定着というのはこれ、客観的な指標の中に押し込むことができますから、そういう意味において、そういう部分がこれからおそらく、もっともっとそういう面が、外からですね、厳しい目って言うんですかね、入ってくるんでしょうけど。そういうのを踏まえて、皆さんからいただいた意見を踏まえて、平準化の問題についても、ある程度皆さんに説明できるように、客観的なものを考えて、そんなところでいかがでしょうかね。

〇栗林教育長
　そうですね。授業日の平準化も含めてそうですけど、基本的にこのプラン全体が、結果として、小中学校の教員を苦しめるものであってはならないと思っているんですね。何のためにやるかというと、やっぱり教員のためであり、ひいては子どもたちのためにあるわけですが。そこは絶対に外しては駄目だと思っていて。その上で、今回の平準化をどうするかという話の中では、授業日数の増とモジュールを導入してはどうかという提案が事務局からあって、それは小学校の方でも方向性としては、ある程度合意が得られて、中学校の方でも同じように合意が得られているという状況ですので、まずは教育委員会としても、そういった方向で一歩を踏み出していきたいなと思っています。その上で、町長がおっしゃったように、私も先ほど申し上げましたように、これが形骸化してもいけない話ですので、またこういった社会情勢なども踏まえて、数値をどう入れていくのかとかがあれですけれども、またそこの表現振りのところについては、しっかりと誰が見ても分かるように。また担当者や管理職や教員が代

わってもぶれないような、そういったうまい表現振りを考える必要があると思っています。

〇田村町長
　先程から言っているように、授業日の平準化については、本日の意見交換の内容を踏まえて、再度検討を進めていくということでまとめたいと思いますがよろしいでしょうか。

（　了解　）

〇田村町長
　皆様の御了解をいただきましたので、事務局、そのとおり進めてください。
　続きまして、プラン全体の構造について、検討してまいりたいと思います。

〇栗林教育長
　私の方から少しよろしいでしょうか。ＴＣＰトリビンスプラン、平成２９年２月にこの資料１のような形で取りまとめられたわけですが。プランとは何かと言われると、この１枚しか実はなくてですね。例えば、⑴のウの外国語、国際理解教育の推進という項目があった時に、どこの市町でも通用する表現になっていて。同じくプログラミング教育の充実などもそうですが、当たり前の表現になっています。ただ、例えば、外国語、国際理解教育の推進ですと、具体的には、予算を付けていただいて、町内各小中学校に１人ずつ４名のＡＬＴとなっています。これは全国でもかなり充実した配置だと思いますし。また、小学校でいけば、全ての英語の時間に必ずＡＬＴが今年度は配置されていますので、こんな市町はないと思うんですね。もっと表現振りというと変ですが、うちの町独自でやっていることが表現できるのではないかなと思っているのが一つですね。
　もう一つは、例えば、町の総合計画もそうですが、お金を掛けて施策をやるのであれば、今どういう課題があって、それをこういうことで解決していって、ひいてはこういう状態になるというような、やっぱり目的を持って取り組んでいく必要があるのかなと思っています。そうすると、ちょっと施策が変わるというわけではないのですが、表現振りとか中身をもっと盛り込んでいかないと、さっきの話にもつながるのですが、やはり担当者によって見方が違ってしまったりとかですね。せっかく町として独自にやっていることが、全て１行で終わって隠れてしまってとかですね。何かそういうところをすごくやってきて感じるところがありましたので。少し全体として検討していく必要があるのではな

いかと正直思ったところです。

〇河口委員
　さっきね、進め方のところで、モジュールのことを取り上げると、それは否定するのではなくて、やっぱり現状としてね、平準化のところを、教育委員会側と学校側とで折り合いを付ける時に、やっぱり日数が入ってきて。そうするとそれをある程度柔らかくするためには、モジュールが必要で。モジュールが非常に効果があるということを実際にやってみてね。今のとおりでいいと思うんだけど。実際に、じゃあこれから進めていく時に、平準化は小中で若干違うのでね。小学校の場合は、ほぼモジュールを導入することが可能なのだけれども、中学校の場合は必ずしもオール５時間とはいかなくて、６時間が当然できちゃうものだから、その辺若干違いが出るものだから、どうしても小中両方合わせた場合には、今№.２のようなことになってしまうのでね。そのへんをどういうふうにしてうまく、教育長がおっしゃったようにしていったらいいのかなというのは、すぐには結論が出ないですけど。ただ、今言えることは、この目標は平準化をする以外には、今の現状を打開する方法はないなと思うんですけどね。やっぱり、どうしても教職員の多忙化と、児童・生徒の学力向上、それから保護者の満足と、３者が共益するには、今考えられるのはモジュールでね。授業日数を少し減らすとかね。そういう平準化。準平準化って言うんですね、今。そのあたりが今一番近道であって、それ以外に現状を打破する方法はないかなというのが最善だと思いますけど。

〇田村町長
　増田委員、いかがですか。

〇増田委員
　前回から比べて基盤的整備という表現で、横串を通した方が分かりやすくなったと思うのですが。そう言われてみればそうだなって思うのですが。大きく括りすぎていて、結局何を行うかというのが、この表現では確かに分かりませんので。吉田町が特に力を入れているものについて、より分かりやすく、これを見ただけで吉田町としてどういう方向性で何を行っていくかが分かるような表現にすべきだなと思いました。

〇田村町長
　北澤さん、いかがですか。

○北澤委員
　各学校にＡＬＴの方が１人いるというのは、本当にいいことだなと思うので、恵まれているなと思います。授業の中にそういう方が一緒にやってくださるというだけでも、子どもたちの経験にもなるので。そういった人がいるのが当たり前になってきてしまっていると思うんですけど。なので、少し表現を変えて。貴重なことだと思うので。それこそ、ＡＬＴが必ず学校に、担当の方が１人いるっていうことが続いていくように。多分続いていっていただけると思うので、そういったことも踏まえて広く浸透していけるような表現があるといいなと思っています。

○田村町長
　塚本さん、どうですか。

○塚本委員
　ここでこれ以上細かいことをどう表現したらいいか難しい。事務局に任せるしかないと思うのですが。モジュールというのも、私がモジュールに賛成したのは、吉田町探求をそこでやるっていうのがすごく響いたんですね、私の中では。資料２０ページがそうなのですが、３年生から６年生までの中で、吉田町の自慢とか、吉田町の福祉とか、吉田町の防災、吉田町の未来とか、吉田町のことを通じて、吉田町のフィールドの中で探求していくことで力を付けていくというので、モジュールの時間を活用してやることにすごく共感したんですね。そういう意味では、出面としてはモジュールじゃなくて、吉田町のことを好きになって、吉田町のことを知ることを通じて力が付くというのが出面であって。モジュールを使った授業日の平準化というのは、陰に隠れていると言うか、現場的なスケジュールにあるレベルであって、本当の目的は吉田町を好きになってもらう。そして学力も付けてもらって、責任を持って１５歳で吉田町を巣立っていってもらいたいというところが大前提の目標としてあるものは書かないと、実はそこがね、現場の先生と共有できているのかって不安になることもあるんですね。吉田町の子どもたちに僕たちは何とかいい教育を受けさせて、自信を持って送り出したいというのがあるのだけれども、中学校の先生にそこが、吉田町の子どもたちがというのがあるのかね。先生たちは吉田町だけじゃなくて、他の市町でも先生という仕事をやっているので、いつでもそう思っているか分からないですけど、僕たちは吉田町の代表としてここに集っている人間としては、吉田町の子どもたちは吉田町にいる時は、本当に力の付いた子どもたちに育てるという目標で一緒に考えてくださいというその目標が共有できれば、もっと平準化の話も一緒に進めていけるのではないかと思うので。その辺が大

前提であるもので出ていないと思いますけど、表現できた方が住民の人には分かってもらえると思います。

○田村町長

これを見てですね、この頃話題になっている東京の麹町中学校の夏休みは、宿題を出さない。一切出さない。そういうふうな夏休みというのは本来どうあるべきかという、そういうところまで入ったいろいろな議論ができてきていますよね。それでうちの町でも指導主事が三軒茶屋の、私はあるところで見いだして、先生に言って授業参観に行ってもらったのですけれども。東京のあるところで、渋谷ですけど、英語と算数、数学ですかね、これを全部タブレットにＡＩのアプリが入っていて。先生は何も教えないんです。先生は立っているだけ。子どもは自分の進度に合わせて、自分でタブレットで勉強している。早い子は１年の授業が２～３か月で終わっちゃうんですね。算数なんかでも最初、みんなスタートは同じなんですよ。それで、自分でこうやっていくんですよ。で、分かる子はどんどん前に行く。分からない子はＡＩが、この子がどこで間違えたのかを判断して、その問題を出すわけです。その問題を解いて、分かってくるとその問題が解けるようになるんですよね。本来は教育というのは、その子の学習進度に合わせた教育をするのが一番いいのだけれども。その意味では極端な話、進度別に授業をやるとか。けれども日本の社会というのは、なかなかうまく行かない。そうすると、その子の進度に合わせた教育という形になっていくと。文科省ではデジタルでの教科がもう始まっているんですね、デジタルです。そういうことで、これから先生というのも、たぶん意味自体が変わってくる。タブレットでやっていくと、そういう時代がそこまで来ているんですよね。そういう時代になってくるから、そういうものを踏まえるとね。もうちょっと突っ込んだ意見があってもいいのかなという感じがしますけどね。このことは資料の中でやるのかもしれないけど。指導主事の先生、見に行った感想はどうですか。

○事務局

個別最適化というのは、やっぱり必要なことだと思っていて。それでもＡＩができることは、知識・理解の習得というところのみなので。役割分担として、知識・技能の習得はそこに任せて、他を先生がやっていくという形を取っていけば、確実な学力が付いていけるようになっていくのかなという感覚は持っています。実際にやっていないのでちょっとあれですけど。

○田村町長
　教育長は行かれましたよね。

○栗林教育長
　はい。すごく驚いたと言うとなんですが、説明の中で、３年で学習することが７か月でできますという話と、７か月やった結果として、本当にそれが身に付いたかというのは、３年に数検の３級の試験、３年終了時点の。それに８割だか９割は合格をしますということなので、ちゃんとそれが身になっているというのが一つ証明ができますというお話をされました。また、今、指導主事からもありましたが、それが発達をしてくると、先生の役割がどんどん変わってくるのだろうなというのは私も感じました。これまで、今、そういう授業をされている先生は、ほとんどいないと思いますが、昔は年号を覚えたりだとか、単純にこの言葉を覚えなさいということが授業で行われていましたが、そういったことはもうこのタブレットがあればできちゃうと。黒板で授業の中で、そういった一つの知識を単純に暗記のような形で覚えさせる授業は、どんどんなくなっていくのだろうなというのは感じました。
　なので、先生の役割というのが、知識を伝達するのが先生の役割ではなくて、そこから関連付けたりとか、比較したり、本当に思考させるとかですね。そういった役割にどんどんと。あとは話し合いのファシリテーターとか、そういった役割にシフトしていくという未来の一端を垣間見たと言うか。未来と言ってもそんなに遠くはない、すぐそこまで来ているような状況なのだなというのを感じました。

○田村町長
　塚本さん、いかがですか。

○塚本委員
　知識があるから、知恵があるから、主体的・対話的学びができるのではないかというのは感じていて。今回の指導要領で、主体的・対話的な深い学びと言う時に、そのベースには必ず知識がなければできないわけで、その両面をいっぺんにやるというのはすごく大変だろうなと思うんですね。で、うちの子どもは附属中学に行っているのですが、附属中学の先生たちは、試験に受かった子どもたちにある程度知識がある人たちだから、対話的だとかコミュニケーションを取った授業がしやすい環境にあると言うか。彼らは何をしているかというと、ほとんど９割ぐらいが塾でものすごい勉強をしているんですね。知識を得るための勉強を。それで学校では先生はあまり動いていなくて、チームになっ

てみんなが議論をしてというアクティブラーニング的なことをやっているんですね。

で、もう普通の公立の中学だと、なかなか塾にも全員が全員行くわけじゃなくて、いろいろな学力の差がある中で、知識も付けさせて、さらに今求めているアクティブラーニングと両立させるというのが、すごく難しいことだと思います。結局今、ＡＩも知識を付けさせればできるけれども、その先の人と人が交流しながら深い学びにしていく、探求していくという、意見を戦わせてという、そのレベルのことができればいいんだけど、それをしながら知識も付けさせる難しさはあるなと感じます。両方やってくれれば一番。両方求められているものですからね。やらなきゃならないというのが現実ですよね。それで大学入試も変わってくるということですよね。

ただ、さっき言った保育園の先生って、パッと見た時に何もしていないと思うんですね。松嵜先生に、先生達は何もしないように僕は思ったんだけど、僕のイメージだと、幼稚園とかのイメージだと、対面的になっていて、先生がいろいろつきっきりで教えているというイメージがあったのですが、保育園の先生は何もしていないなと思ったんですね。で、後から聞くと、何もしなくても子どもたちが自然と力を付けている。遊びを見つけて会話をしながら力を付けていくというしつらえをしている。準備ができているって言うんですね。掲示物も含めて遊ぶものだとか、そういったものに工夫を凝らして、自然と子どもたちが勝手に力を付けているような環境にしていることに意味があるんですよと松嵜先生に言われて、いや、本当にそうなっていて、勝手に子どもたちが力を付けているということが現実だったら、素晴らしいことだと思ったのですが。そういう意味ではそういうアクティブラーニング的なことはできているという評価を先生はしてくださっていて。それを中学とか小学校の先生にも見てもらえれば、何かしらの刺激を受けて、しつらえたり、準備が重要だということになると、最初の話に戻るのですが、先生たちが授業の準備をして、こういう授業をしたら子どもたちが自然と力を付けるような環境になるっていうね、そういう環境を整えることに時間を取りたいなって思うところに行き着くんですけどね。

○田村町長

河口委員、いかがですか。

○河口委員

僕はＡＩの話を聞いていて、そうなった時にね、先生が大変になると。要するに、今までだったら大体平均点にのせていたと言うか、この学年はこのぐら

いの力を付けるというのでやっていたのだけど、ＡＩだと、こうなっちゃうと、すごく差が付きますよね、学力に。どこに照準を当てたらいいかというか。要するに、真ん中に当てると、上の子は遊んじゃうわけでしょ。どんどん進んじゃう子は、知識があるからわかっちゃうよね。今まで以上に差が開くので、それに対応して、上の子にも下の子にも満足させるというのは、すごい教師として大変なので。逆にね。ＡＩが進めば進むほど大変になるなということは感じます。一方でね、そういう難しさがあるというか。よりそれを生かすには、より優れた教師の手腕が必要だなと思いました。

〇田村町長

北沢委員は、子どもをここの学校に送り出しますよね。子どもにこういう教育をしてもらいたいというのが、当然のことながら保護者ですから思いますよね。ここは分かりました。これを今やっているんですよね。こういう表現でいいですか。なぜかというと、平板で立体的じゃないんですよ。厚みがないものだから。これってある程度の理解ができても深みがない。だから３Ｄ構造のようなそういうふうなものがないんです。もうちょっとこれ、この下になるのかもしれないんだけれども。これのもっと深めたものがどこかに入ってくると、具体的に分かりやすいような感じがするんですけどね。どうですか。どんなふうに思いますが。いや、保護者というのは大事なんですよ。保護者が一番声を上げないというのがあるんですよ。自分の子どもがいるから。全体にこういう教育をやってくれとか、こういうところはおかしいじゃないかとか。保護者の皆さん、学校に要求とか要望を突き付けないでしょう。子どもが人質に取られてるみたいで。

〇北澤委員

すごくこれからどんな未来が待っているのかというのが、私も新聞とか読みながらも思うのですが。上の子がちょうど高校２年生なので、大学受験が変わるということで、そういった面でも気になる部分がすごくあって。じゃあそれをこの子は乗り越えられるのかと思った時に、どんな教育が今必要とされているのかって。高校もすごく丁寧に指導をしてくださっている部分があるのですが、自ら主体的に動いていかないと、子ども自身が学びに対して、積極的になれるような環境があることが一番なのかなというのをすごく感じています。国際化もそうなのですが、英語ってとても身近になってくる。私は全然英語なんか話せないのですが、子どもにちょっと期待するところがあったりして。でも、それってすごく子どもの行動範囲が広がる可能性もある分野なので、すごく英語教育というのは期待したいところがあって。うちもすごく引っ込み思案なの

で、なかなか話し掛けるというのができないのですが、これからの社会が求めるものってやっぱりアクティブラーニング。自分の意見が堂々と言えないとやっていけなくなるのかな。この子は大丈夫なのかなという部分もあるので。そういった部分で、この子にはどんなものが必要なのかというのを考えることがとても多いのですが。そういった中で、先ほど言われたＡＬＴの方が学校にいる。すごく恥ずかしそうに会話をする部分を見たのですが。それだけでもうれしいんですよね。うちの子もちゃんとあいさつができているだとか、話し掛けてもらっているって。外国の方と普通に接するのが、学校にいるのが、当たり前。この町の中で出会って当たり前っていうそういう環境がすごくいいのではないかなというのも感じますし。それこそ先ほど言われたＡＩのタブレット教育というのも、子どもが今塾に行っているんですけど、塾ではすごく取り入れられているので身近なんですね。子どもたちにとっては。

で、やはり自分の時間。限られた時間でやる時もあるのですが。そういう時に何回も同じ問題が出てきたりして、それが足りないところなんだよっていう部分で会話とかして。だから同じような問題が何度も出てきちゃうのだから、そこを頑張ろうねとかっていう会話をよくしていて。それが学校教育に入ったらすごいなとは思うのですが。学校に求めるものと、それこそ補助的な学習に求めるものってやはり違うので。やはり学校に求めるものは、日常的に環境が整っている部分が、それこそ、これからの未来の自分たちが生き抜く社会に必要になるものの教育が整っている部分を期待したいので。英語に慣れ親しむ環境であるとか、それこそＡＩに強くなる。私などよりもタブレットでタイピングとか、子どもの方が早かったりするんですけど、そういうものをやはり自分の世代よりこれからの子どもたちが、もっと深く早い段階で触ることができる環境というのが、この中に入っていると思うので。そういったものが分かりやすく表現した方がいいのではないかなとは感じました。

○田村町長

増田委員、どうですか。

○増田委員

うちの子も本当になかなか勉強が苦手な子揃いなのですが。自分の頭で考える子になってほしいなというのは常に思っています。ただ、塚本委員の話もそうですが、考えるに当たってはその知識が根底になければいけなくて。さっきのＡＩの学習の話なのですが、むしろ僕は格差が縮まるのではないかと話を聞いて期待しました。各自のレベルに合わせてやることによって、できない子もできないところを集中的に問題を出すことによって上がっていく。授業につい

ては、知識を定着させるものではなくて、それをいかに活用させるかというディスカッションを中心としたものに進んでいけば、非常に素晴らしい教育になるのではないかと思いました。

で、それでトリビンスプランの施策というふうに見ると、やはり具体がなく、イメージができないというのは、おっしゃるとおりなので。何を吉田町は進めたいのかが分かるような表現を検討すべきだと強く思いました。以上です。

○田村町長

塚本さんは企業の最前線にいると思うんですけど、そういう中小零細企業がまさに経済人として一番厳しい環境に向かっていくわけなのですよね。そういう人間からして、経済人から見ていかがですか。

○塚本委員

町長がさっきおっしゃったように、３Ｄじゃない、奥行きがない、立体的じゃないというのは確かにそのとおりだと思います。やっぱり、各市町にこれまでも教育委員会で研修に行ったりしていると、いろいろなパンフレットを作っているのですが、やっぱり分かりやすいのは、この町は何を中心にどういう子どもを作ろうとしているかというのが明確な町は、それに付随することを書いてあるのもすっと入ってきやすいんですよね。今で言うと大綱みたいなものになるのかもしれないのですが。大綱もいろいろな要素を入れ込んでいくと、どんどん表現がどこでもあるような表現になりがちですよね。多くのものを入れ込むと。ただ、この町として１５歳で巣立つ時に、こういう子どもたちを作るっていう、こういう子どもを吉田町が作るっていうのがパッと明確にできれば。そうするとそれに対する施策が、こういうのが入ってきてもそれにつながっていくというのはイメージがしやすいので。そのために、そういう表現ができればいいのではないか。目標と言うか目的と言うか。

○田村町長

例えばですね、外国語・国際理解教育の推進ということは、英検２級とかね。ちょっとした簡単な新聞記事を読めるとかね。そうすると、ああそうなのかと具体的に分かるんだよね。推進といっても、誰も分からない。分かるんだけれども、その分かった段階で具体的なものがないものだからね。目標的なものとかね。私は時々、先生方を困らせるような話をやるんですよ。例えばね、今から４０年後、２０６０年。国際的な中で非常に大きな話題になってきているんです、２０６０年っていうのが。２０６０年って言うと、今の中学校３年生が５５ですよね。今小学校に上がった子どもさんが４６ですね。まさに社会の本

当に中核部分を形成する人間なんですね。じゃあ、２０６０年ってどういう時代だっていうことは、数字的には出ているんですけれども。例えばですね、２０１６年と２０６０年のデータを見ていくとですね。すると、世界のＧＤＰ別でずっとこう、国を分けていくと、日本が２０１６年の人口が１億２，７７４万９，０００人なんです。これはもう正確な数字なんですよ。人口の推移というのは正確なんですよね。それが、２０６０年には８，６３７万７，０００人。３２．３％かな。こんなにめちゃめちゃ人口が減る国はないんですよ。よく日本は少子高齢化、人口減少と言いますけど、少子高齢化と人口減少が両方進んで、はっきり分かるのは日本だけです。例えば、単純な話、アメリカは２５．２％。２０１６年よりも２５．２％人口が減るわけです。中国は減ります、９％。イギリスとかフランスは増えるんです。インドも増えるんです。３２．何％。人口が増えるということはものすごくすごいことなんですよね。日本は、人口が減るというのは、どういことなのか、空恐ろしいことになってくるわけですね。少ない人間が苦しまなければならないんですよ。競争環境がものすごく厳しい中で。その中で考えると、もうちょっとこれ、具体的なことを言っていかないと、イメージが湧かない感じがするんだよね。イメージを湧かせるってすごく大事で。これはイメージが湧かないんだよね。調査結果に基づいた授業実践だとか、外国語・国際理解教育の推進だとか。イメージが湧かない。トレンドとしては分かるけど、イメージが湧かない。だから３Ｄじゃないと。そういうのも含めて、もうちょっと、ある程度イメージが湧くようなものを考えなくてはいけないんじゃないかな。もしこれに表すのが難しいならば、この下でちょっと触れるだとかですね。河口委員、それはどうなのですか。

〇河口委員

結局、施策の概要となるとそうなりますよね。だから今、町長がおっしゃったように、具体例を入れると大きくなりますよね。どっちが分かりやすいかという。下にさらに詳しいものというのがいいのか。施策はそうなっちゃうんですよね、施策は。だから、子どもの姿を描くとすると、もっと具体的だと思うんだけど。だけど、こういう予算を使って、こういうものをやるよとなると、こうなりますよね。だから、子どもの立場に立って、子どもを主語にすれば。例えば、外国語の関係ではこういうふうになるんだって。そういうふうにすれば分かりやすいかもしないけど、それは施策じゃないと思うんですね。

〇田村町長

方針があって、施策があって、事業がある。これって事業だろうと。

○栗林教育長
　先日、町の行財政構造改革推進本部でしたか、その中で指標をどうするかという議論があって。その中で指標というのは、町の姿勢でもあるという話がなされていたのが印象としてあって。このプランを出すということは、これは教育委員会の姿勢。うちとしてこういうものを目指していくんですとかですね。そこは保護者とか町民へのメッセージにもなると思っているんです。そうした時に、この表現だと何を目指しているのか。何となく全体としていろいろやるんだねということは分かるのですが。じゃあ、本当に教育委員会としてどういう姿勢で何を目指すのか。どういう覚悟を持ってこれをやっていくのかというところが、やっぱり伝わりにくい。まとめちゃっている分伝わりにくいと思っているところもあって。概要なので、まずは概要として、これで詳細版というやり方もあるでしょうし、いろいろ工夫の方法はあると思うのですが、そこはもう少し工夫が必要なのかなと。その姿勢を出していくということが、塚本委員がおっしゃったような、町としてどういう子を育てていくだとか、１５歳、中学校を卒業する時には、どういう子になっているというのが見えてくることにもつながっていくかなと思います。

○田村町長
　どうですかね、他にも追加したい御意見があれば。先生の日常生活というのがよく分からないのですが。先生がどんな日常を過ごされているかということがよく分からないですよね。

○河口委員
　日常は、授業をやって、授業が終わると、宿題とか丸付けだとかね。保護者への対応だとか。授業ではできないことをやりますよね、とにかく。授業中では電話もできないしね。普段電話するようなところに電話をするとか、それも必要ですよね。勤務も４時半までだけど、それもあってないようなものだから、自分が終わったら帰るという。遅い人は遅いし。遅くならないと仕事が片付かない人は遅くまでやるし。だからどうしても帰りたい人は工夫してやりますよね、仕事は。

○田村町長
　教育について語ることは、ものすごく難しい。私は、北澤委員のような保護者の皆さんが、もう少し学校に対して意見を言ってもいいと思うのに言わないんだよね。どうなんですか。

○河口委員
　でもあれですよ。僕も４０年ぐらい前に先生の仕事を始めたんだけどね。そのころと比べると、ずいぶん変わりましたよ、学校の中が。要するに、開かれた学校になってきているしね。若い方は分からないかもしれないけど、ずいぶん昔は、学校は閉ざされた部分があったんだけど、今はボランティアだとか、地域の方が授業に入ってくれたりして。学校の授業を自由に公開したり。ずいぶん変わってきていると思うんですね。それから、なんと言うか、学校の地位も下がっちゃって、世の中が言いたいことを言って、学校だけじゃないですけどね。学校現場にも保護者がいろいろなことを言ってきて、大変な時代というかね。昔、４０年ぐらい前にはなかったようなことが起こってきていると言うか。だからこそ、先生方が大変になってきているわけで。保護者への対応にしても全然違いますしね。昔のような、先生、先生、じゃないですしね、今は。先生のくせにという時代でしょう。だから変わってきているんだよね。

○田村町長
　先生受難時代になってきたというね。

○河口委員
　今は新採の先生に辞めないでもらいたい時代ですよ。今は辞めさせないでくださいという時代ですよ、新採の先生をね。

○田村町長
　河口委員が先生になられた頃と、今先生になろうとする人は違うでしょうね。

○塚本委員
　ただ、この間、松嵜先生がおっしゃっていたのは、今のカリキュラムで大学で学んできた新しい先生たちは、新しい方針でのカリキュラムを学んできているから、新しいものを持って入ってくるから、これからは期待できるんじゃないですかっていう話をしたら、入った時点で、今上にいる先生達が昔の考え方だからつぶされていって、自由なことはできないという環境があると。だから、学校は管理職なり上の人間を変えない限りは変わらないということはおっしゃっていました。新しい人に代われば、新しい考えがどんどん入るから変わるかと思ったら、そんなうまくないって言っていました。これは僕の意見じゃないです、松嵜先生の意見です。

○田村町長
　教育長、どうですか。

○栗林教育長
　まあ、やっぱり全国的に教員の倍率なんかもかなり低くなってきていることが、一つの課題になっているところはありますし。それが、力がない人が入ってきているとは思いませんけど、教員に対するイメージなんかがかなり良くないものがあって。それをどう払拭していったらいいのかというところが一つの課題になっている。学校全体の年齢構成なんかも、いびつな年齢構成であると。大量採用の時期もあれば、ほとんど採用しない時期もあってという、いびつな年齢構成になっていることも、学校運営を難しくしている一つの原因なんじゃないかなと思っています。

○田村町長
　もっともっと保護者が教育に対してものを言っていいと思うんですよね。モンスターペアレントじゃなくて。先生方も授業でやっていることをみんなに分かるように説明してくれないとね。そうしないと相互理解が進まないものね、なかなか。そういう面で行くと、行政なんて激しいものですよ。行政なんか、しょっちゅうやられてますもんね。

○河口委員
　学校もずいぶん情報発信をするようになりましたよ、昔に比べると。アンケートを採ってね。学校が楽しいとか楽しくないとかアンケートを採って、それを保護者に出してね。だから昔と比べたら、学校の中の様子を伝えたりとか、情報をお便りで出したりだとか、ずいぶん変わってきていると思いますけどね。

○田村町長
　ひとつは、特色のある夏休みをやったらどうですか、公立の中学校でね。麹町中学校みたいに。宿題なしとか。

○塚本委員
　定期テストもなし。

○栗林教育長
　麹町中はそうでしたね。

○田村町長
　定期考査もなし。しかも公立ですからね。

○塚本委員
　でも、校長先生の意思でできたんですね。

○田村町長
　できますよね。だから、夏休みに宿題を出すってどういうことですかって先生に聞いたんですよね。ただの気休めじゃないですかってね。もうちょっと、こう、特色とか、夏休みに。みんな横並びで、なにかやると怖いんだよね。うちなんかは、閉庁日なんかをどんとやって、もう学校に来るなって言うんですよ、先生は。そのくらいの方がいいんだよね、本当に英気を養ってもらうためにはね。先生は好きなように時間を使って、休みたければ休めと。勉強したければ勉強しろって、自分でやってくれって。まさに先生というのは、独立した職業ですよね。そうすると独立したある程度自由裁量がありますよね。だから自由裁量が利く場合には、やっぱり自由裁量が利くように、先生に力を与えて、休みたければ休む。勉強したければ勉強するとか、そういうふうにやらせた方がいいような感じがするんだけどね。それをやらせるのが怖いんだよね、現場ではね。

○栗林教育長
　一つは校長先生の御意見であるとか、学校の状況であるとか、それに対する保護者の反応であるとか、そういったところが気になるんですね。そういうところで慎重に進めていかないといけないかなというのがまず第一義として。

○田村町長
　結局最終的にはアウトプットですよ、アウトプットが出せれば。こうやっていますよって、結果は出ていますよって言えますからね。結果を出されたら、人間二の句がつけられないからね。自信を持って先生が自由裁量で自分の時間を使うだとか。先生ってそういう職業なのかもしれないんだよね。だからその時は、責任というかペナルティをとってもらわないとね。先生という職業はどうなんですか、四十何年おやりになって。

○河口委員
　まあやりがいがあるって言うかね。教えた子どもたちが成長していく満足感と言うか達成感と言うか。

○田村町長
まあ、いろいろな忌憚のない御意見をいただきましたが、プラン全体の構造について、皆さんから出た意見を、こう、もう一度イメージしやすいようにするとか、もう少し考えるとか、そうしていただけますか。そんなところでよろしいでしょうか。皆さんからいただきました意見を踏まえて、事務局の方で進めていただきたいと思います。

⑵　吉田町教育大綱について

○田村町長
次に二つ目の議事であります吉田町教育大綱について、事務局の説明を受けます。

○事務局
まず、本日お手元に資料№.４、５、６と配布させていただいておりますが、資料№.４の吉田町教育大綱の３ページをご覧ください。この教育大綱につきましては、平成２８年２月に策定いたしまして、２８年度から３１年度までの４年間の計画として作成をしております。これは総合教育会議において協議、決定しているものでございます。今回平成３１年度、令和元年度までということで、令和２年度からですね、またさらに令和５年度までの４年間の計画を新たに策定したいと考えております。この策定に当たりましては、資料№.６をご覧いただきますと、このようにスケジュールを組ませていただいております。こちらはですね、本日１１月ということで、この総合教育会議を開催させていただいておりますが、２月に次期大綱について、協議、決定をしていただきたいと考えております。そこに向かうまでのスケジュールですが、教育推進委員会というのがございます。この教育推進委員会というのは、資料№.５にございますが、今この分掌が、第２条を見ていただくと、町長が招集する総合教育会議での協議事項に関する事項、その他町の総合的な教育の推進に関する事項というのがございまして、前回もこちらの委員会を立ち上げた中で、大綱を検討しているということがございますので、今回も推進委員会を設置した中で協議していただきたいと考えております。
こちらの推進委員会については、第３条に委員は１０人以内を持って組織するということがございますので、資料№.５の裏面をご覧ください。現在１０人以内ということで、事務局の中で想定をしておりますのは、１の中学校長から小学校長代表、教職員、特別支援学校の校長、幼稚園代表、社会教育委員長、

自治会連合会長、あとはＰＴＡの母親代表。後は静岡大学の先生ということで、その１０名で委員会を組織して、検討していきたいと考えております。

今回ですね、この教育大綱の改定と合わせまして、実際に今町の第５次総合計画の前期基本計画がこれと同じスケジュール、計画期間になっていまして、現在後期の基本計画の策定を進めております。こちらは同じ計画期間の中で平行して進めていかなければならないこともございますので、資料№６の下の部分のところにですね、総合計画の進め方についてのスケジュールも合わせて明記させていただいておりますので、この辺で足並みをそろえた中で、策定を進めていきたいと考えております。

今回ですね、こちらの進め方と、先ほど御説明した推進委員の構成ですね。そういったところをまず御承認をいただきたいということと、あとはですね、教育大綱。この４年間の施策の方を町の方で進めてきております。その中でＴＣＰトリビンスプランに掲げている施策も、この教育大綱に基づいてやっているものでございますので、切れ目のない効果的なつながりのある教育では、幼児教育カリキュラム、スタートカリキュラムの作成や小中つながりのある教育検討委員会を設置した中で進めているものもございます。確かな学力の定着につきましても、ＴＣＰの中にもあります公設学習塾であるとか、ＡＬＴの配置、授業改善などを実施しております。

その他にも社会教育という部分では、多様なニーズに応じた生涯学習活動の推進というのが重点施策にございますが、チャレンジ教室の充実であるとか、シニアカレッジの設立といったものをこれまでやってまいりました。スポーツの環境についても、総合体育館の耐震化ですとか、トレーニングルームの充実ということで、この４年間の中でそういった部分に取り組んでまいりました。

この次の４年間についても、そういったものをさらに充実していきたいと考えておりますので、こちらについても御意見をいただければと思います。

まず、今回のスケジュールやこれについて今後進めていく中で、本当にこういう部分が重要ではないかというものがあれば、一言だけでも御意見をいただければと思っておりますので、その辺を検討していただきたいと思います。

ただ、申し訳ございません。時間が、３時が終わりの時間となっている都合もございますので、そこについて時間がなくなって非常に申し訳ないのですが、ご議論をいただければと思います。

○田村町長

教育委員会を代表して、教育長の方からどうですか。

○栗林教育長

教育大綱、４年ということで改定の時期ですが、一つは先ほど事務局からありましたように、総合計画の進捗状況と併せて、足並みをそろえていく必要があると思っているのが一つです。あともう一つは、大綱をご覧いただくと、先ほどのトリビンスプランでもないですが、総花的にいろいろなどこにも落ちがないような形で、全体として書かれている部分があります。この表現は大綱なので、仕方がない部分もあろうかなとは思っておりますので、構造から何からガラッと変えるよりはですね、大綱なので、基本的にはこういうあり方を前提としつつ、やはり時代の変化とか社会の変化に伴って、より町として推進していきたいこととは何なのかというのを、少し色濃く出せるようなところは出すという方向で改訂をしてはどうかなと。大綱の性格も含めて思っているところです。

○田村町長
それでは、教育委員の方からこうすればいいであるとか、意見をいただければ。塚本委員からどうですか。

○塚本委員
そんなに経ったのかなという感じがするのですが、なかなか大綱で書いてあることは大きな目標なものですから、達成できているかできていないかというよりは、これに向かっていろいろな施策をやってきて、近付いたのかもしれないけど、なかなか遠い目標だなというのも感じているので、そんなに変化はない形でいいと思うんですけどね。ただ、具体的な重点施策に関しては、ここでどうというのはないのですが、若干修正を加えるのがいいのかなと。特に私、町の総合計画の会議に出させていただいているのですが、総合計画の方もかなり具体的なものでは、特に防災なんかがこの間の会議でもたくさん出ているのですが。そういったものでずいぶん変わってくるところもあるので。そういうところを併せる形で。教育は教育の大綱で話し合うのでということで、私はそこで意見を言わせてもらったのですが。そういった部分で施策の方向性ですかね。そのところで若干手直しを。全体的には、これまでのものを引き継ぐ形でいいと私は思います。

○田村町長
塚本委員、策定スケジュールもどうでしょうか。

○塚本委員
そうですね。

○田村町長
　それでは、北澤委員お願いします。

○北澤委員
　私も大綱を見させていただいたのですが、すごくこの作られた時の議事録も見せていただいたのですが。よく皆さんの意見が入っている、方向性もすごく細かくなっている中で、私も教育委員をやって３年になりますけど、これに基づいたものがやはり実行されている部分というのは目に見えているので、ＴＣＰトリビンスプランもそうなのですが、これからのニーズによって変わっていくという部分もあるので、そういったところも盛り込んで書いていって、より良いものをと思っています。

○田村町長
　スケジュール的にはどうでしょうか。

○北澤委員
　できるものなら、やっていただきたいなと。

○田村町長
　増田委員、どうですか。

○増田委員
　計画から大きく変えるものではないと思いますが、吉田町の特色の一つとして、防災が挙げられると思います。防潮堤のかさ上げ。防災公園、避難タワーといったハードは今とても整っているのですが、あとはソフト面で自分の命を守る教育。防災教育という視点があるとより良いのではないかと思いました。以上です。

○田村町長
　河口委員は先生の立場ですので、大綱の捉え方をですね。

○河口委員
　ちょっと難しくてあれなんですけどね。基本的にはそう変わるものではないと思うのですが、ただ、基本方針とありますよね。方向性。別紙の紙。あれを見ていると視点として生涯学習が結構出ています。学校教育だけで別にしても

いいかなと。その方が分かりやすい。要するに、一番のものには、学校教育と幼稚園と全部、生涯学習とか入っていますよね。で、２段目には生涯学習の部分と小中の部分と入っていて。その辺を整理した方がいいかなと思うので。学校教育だけをプロダクトして、要するにＴＣＰをやっているんだという特色を表した方がいいかなと思います。ただ、順番がね、順番というか整理する、まあ、内容的には同じなのですが、整理した方がいいかなと個人的には思いました。

〇田村町長

まあ、大綱というものは、非常に難しい部分もあるんですけれどもね。教育の方向付けですかね。大きな意味での方向付けをするものですから。今皆さんからいただいたものを踏まえて、やっぱり、生涯教育としてとか、人間としてとか、社会人としてとか、それからさっきのこれからの時代を見据えてとか、そういうのが入ってくるでしょうから、それにどこまで入れたらいいかということでしょうけど、いかがでしょうか。

それでは、皆さんの御意見を私のところで聞きましたので、それを踏まえて策定していきたいと思っています。よろしくお願いします。

３　閉会

〇事務局

それでは委員の皆様、長時間にわたってありがとうございました。以上をもちまして令和元年度１回吉田町総合教育会議を閉会します。恐れ入りますが相互の礼を交わしたいと思います。一同礼。